

動詞後の「在」について

呉 念 聖

§0 はじめに

補語は中国語の一大特徴である。その会得は相応する修飾語を有しない日本語を母国語とする日本人にとって当然難しい。まして中国語文法体系がまだきちんと整っていない現状の下で、困難さはなおさら増すものであろう。筆者は、語学学習の実践第一を認めながらも理論的な解明が不可欠なことだと確信している。

小論においては、補語研究の一環として動詞後の「在」を考えてみたい。

§1 既存説

先ず、

我住在上海。

を例にして現在、動詞後の「在」についての諸説を確認しておきよう。

- ① 介詞説 「在」を介詞とし、「上海」を「在」の賓語とし、そして「在上海」を介賓連語と見なして「在」の場所補語とする。
- ② 結果補語説 「上海」を「在」の場所賓語とするが、「在」を動詞と見て「住」の結果補語として「住在」を動補連語と見なす。
- ③ 動態助詞（助動詞）説 「在」を「住」の動態助詞とし、「上海」を「住」の場所賓語とする。^{*1}

小論は、動詞後の「在」を、場所状語^{*2}の中の「在」及び結果補語や趨向補語などと比較することを通じて、諸説の長短を鮮明にすると同時に、より分かりやすく、且つより厳密な文法解釈を目指そうとしている。

呂叔湘は、「一般には、二つ半のものを文法分析の基準にすることができる。その二つのものは形態と機能であり半分のものは意味である。三者の間に矛盾がある時、または結論が幾つかもできそうな時には、形態を最重視する。」と言っておられる。^{*3}それは小論の分析作業の基準でもある。なお、「在」の前の動詞を小論において前動詞と称することにしている。^{*4}

§2 場所状語との比較

§2.1 「在」を動詞の後から動詞の前へ

ここでは変換法を使って比較を進めていきたい。

- a 我住在上海。(私は上海に住んでいる。)
- b 他坐在椅子上。(彼は椅子に座っている。)
- c 书放在桌子上。(本は机に置いてある。)
- d 请把书放在桌子上。(本を机に置いてください。)
- e 一枪打在马背上。(銃弾は馬の背中に当たっている／当たった。^{*5})

- f 跳在沙坑里。(砂場に跳び入れる／跳び入れた。^{*6})

を、意味を変えないように、場所状語のある文に変換してみたら、

- a' 我在上海住。
- b' 他在椅子上坐着。
- c' 书在桌子上放着。
- d' ?
- e' 马背上被打一枪。
- f' ?

となる。

a から c は、文によって「着」を加えたが、割合にうまく変換されている。理由は「在」の前動詞の持続状態を表す文だからであろう。動詞後の

「在」は場所賓語を導くのみならず、その前動詞の持続を表現する役（副詞の「在」がそのような機能を持っている）をも果たしているようである。

dはいわゆる処置文である。変換はできない。

eは変換はできているが、ただその変換後の文には「在」を使う場所状語がない。

fもできない。

できない理由はdからfまでの文がみな前動詞の結果を表している。動詞後の「在」は前動詞が及んだ結果の場所（帰着点）を導き出し、「到」の意味合いが強い。

2.2 「在」後に「了」をつける

a 他一屁股坐在沙发上。(彼はボンとソファに座り込んだ。)

b 把书放在桌子上。(本を机に置いた。)

c 一枪打在了马背上。(銃弾が馬の背中に当たった。)

d 跳在了沙坑里。(砂場に跳び入れた。)

以上の例文の中ではみな「了」を使っている。そういう意味で「在」を前置詞として見るのが如何という意見が生じた。

それらを場所状語のある文に変換してみたら、結局は、

a' 他一屁股在沙发上坐了下来。

しかできなかった。しかも言葉の増加があってまた意味上も差が出ているかも知れない。

ここの動詞後の「在」はやはり結果を導き出しているようであり、みなも「到」で換えられる。

2.3 「在」を省略する

他一屁股坐在沙发上。
を、

他一屁股坐沙发上。

にすることができる。ただ、その時、「了」を前動詞の後につけることができなくなり、つけるなら文末にするしかない。つまり、

他一屁股坐沙发上了。

となる。それに対して、場所状語の「在」は絶対省略できない。

2.4 「在」を動詞の前から動詞の後へ

今度、逆に、次のような場所状語のある文、

a 他在黑板上写字。(彼は黑板に字を書いている。)

b 在沙坑里跳。(砂場で飛び跳ねる。)

を補語のある文に変換してみよう、

a' 他把字写在黑板上。

b' ?

となる。

a'の表現は余りよくないが一応できる。bはできない。その文は§2.

1のf,

跳在沙坑里。(砂場で跳び入れる／跳び入れた。)

と好対照となっている。つまり、ここでは動詞前の「在」はその動詞の持続する場を導くのに対し、動詞後の「在」はその動詞が及んだ結果の場を導くのである。

§2.5 まとめ

共通点として、「在」は場所状語に位置せよ、動詞の後に位置せよ、ともかく場所詞の賓語は不可欠なのである。

相違点として、形態の面では「了」がつけられるか否かという点と、省略可能か否かという点と、また当然ながら動詞との順番及び動詞との距離の違いという点であり、機能の面では前動詞の発生・持続する場かそれと

も必ずしも発生・持続するのではない場（帰着する場も）を導くという点であろう。

§3 結果補語との比較

§3.1 「到」などの場合

動詞後の「到」は幾つかの意味も持っている。北京語言学院出版社刊『汉语动词-結果補語搭配词典』（漢語動詞-結果補語の組合せ辞典）*7によれば、「到」は所収322コ結果補語の中でトップを占め、一番数多くの延べ288種もの前動詞と組んで用いられる。用法は六つもある。そのうち、場所賓語を取るのが127で時間賓語を取るのが71である。それらの使い方は「在」と類似する。例えば、

- a 他把我送到村口。（彼は私を村のはずれまで送ってくれた。）
- b 他回到了家乡。（彼は故郷に帰りついた。）
- c 他又回到这里来了。（彼はまたここに戻ってきた。）

場所詞の賓語を欠かせないこと、その賓語を動詞の前に置けないこと、「了」がつけられること、そして前動詞の帰着点を表すことなどの面では「在」と一致する。

ただcのように、場所詞の後に「来」（「去」）をつけられるという、「在」のない使い方もある。

しかし、

票买到了。（切符は手に入れた。）

という文の中の「到」は前動詞の目標達成という結果を表し、次の§3.3で述べられる他の結果補語と同類になる*8。

§3.2 「向」「往」「自」「于」の場合

前にあげた北京語言学院出版社刊『汉语动词-結果補語搭配词典』（漢語動詞-結果補語の組合せ辞典）には「向」「往」「自」「于」が入ってい

ない。どれも介詞として取られているためであろう。確かに、「向」と「往」とは独立した動詞として使われるのも希にしか見られないのであり、「自」と「于」とは独立した動詞としてまったく使えないのである。その上、後の二者は書き言葉なので古漢語文法に基づくところがあるから一概して論じることもできない。

しかしながら、そのどれも、動詞後に置かれる時の使い方は、形態上は「在」と極めて似通っているので、小論においてやはり些か言及したい。その品詞帰属の問題をさておいて、先ず実例を見てみよう、先ず「向」の場合、

- a 奔向前方。(前に向かって走る。)
- b 他把目光转向了我。(彼は視線を私のほうに向けた。)

後の例は「了」がつけてある。さて、今の二例を「向」とその賓語を動詞の前に置くように換えてみよう。

- a' 向前方奔(去)。
- b' 他把目光转着我转了过来。

どちらも「向」は動詞の方向(場所も含む)を示す役をしている。ただ「向」の前に使える動詞は少数の移動動詞に限られる。

次に「往」を見る。

- a 公路通往山区。(道路は山間部に通じている。)
- b 车队开往北京。(トラック隊是北京に向かって進む／向かった。)

どのように、「往」は動詞の目指す場所を導く。組める動詞も極少数の移動動詞に限られ。その時、「往」は Wǎng と発音する。変換法を行うと、

- a' ?
- b' 车队往北京开去。

となるが、その時に、「往」は Wǎng と発音し、「望」で換えられる。

最後に、「自」と「于」を見よう、

- a 来自农村。(農村から来る。)

b 熊猫产于中国西南山区。(パンダは中国西南部の山間地帯に生息する。)

この二例は次のように変換できそう、

a' 自农村而来。

b' 熊猫于中国西南山区所产。

書き言葉なので簡単に比較できないが、変換できるという点から結果補語と解釈し難いところがある。「自」は動詞の前後に位置するかに関わらず、動詞の起点を表している。「于」は原則として動詞の後につき、動詞の発生か持続を表している。

§3.3 「完」などの場合

先ず、次の例を見てみよう、

你们看完那本书了吗？(君達はあの本を読み終えましたか。)

我看完了。(私は読み終えました。)

我还没看完。(私はまだ読み終えていない。)

ここでは、「完」は「看」の結果補語となっている。「书」は「看」の賓語である。ただ、賓語がはっきり分かる場合、賓語をつけなくても文を終了できる。その上、賓語を文頭に置くこともでき、いや、むしろ文頭に置くことが多い。つまり、上述の文は、

那本书你们看完了吗？

という形で表現されるほうが普通であろう。

「完」と同様に、「见」「懂」「好」「错」「对」「会」(一部の「到」)など*⁹が結果補語として使われる時に賓語を文頭に置くことができる。そして、賓語なしで「了」で終了でき、或いは否定詞の「没」があれば結果補語を以て終了することもできる。

しかし、動詞後の「在」は場所賓語を絶対必要とする。その賓語を文頭に移動しなくてはならないし、省略することもできない。

§3.4 まとめ

動詞後の「在」を前動詞の結果補語（必ずしも意味上の結果ではないが、形態上の結果になっていることには違いない）と解釈してもいいが、しかし明らかに、「到」などの少数のものを除いて、多くの他の結果補語と次のところが違う。つまり、「在」の賓語は場所賓語であり、それを省略することができないし、前置きすることもできない。

§4 趨向補語との比較

次には、いわゆる趨向性のある移動動詞である、

上 下 進 出 回 過

の、趨向補語としての用法と比べてみる。

a 他走进教室。(彼は歩いて教室に入る。)

b 他坐在沙发上。(彼はソファに座っている。)

を見ると、両者は形態上はほぼ同じ。唯一の違いは方位詞の有無である。

ただ、aを、

a' 他走进教室里。(彼は歩いて教室の中に入る。)

に改めてもいい。

同じ場所賓語を取っており、場所賓語の前置き不能という点は両者がまったく同じと言ってもいい。しかも賓語なしで終了できず、賓語なしで「了」をつけても終了できない点もそうである。

ただ、「上」などに趨向補語の「来」か「去」をつけて終了できるが、「在」の後にはつけられない。

§5 おわりに

動詞後の「在」は、

- ① 場所状語の中の「在」とは形態上は似ているが（勿論、文中の位置が違う）、機能的に異なることが多い。故に同じように介詞として

見るのが難しい。

- ② 他の多くの結果補語と機能上は近いが、場所賓語必須・前置き不能という点から形態上はまったく違う。従って、他の結果補語と区別無しに見るのは失当ではないのか。
- ③ 実意を持つので助動詞扱いは無理であろう。
- ④ 現在、趨向補語と称せられる「上・下・進・出・回・過」などと、形態上も機能上もかなり近いので、一つのグループにしたほうが分かりやすいのではないのか。^{*10}その外に、動詞後の、場所賓語を取る「到」などもそのグループに入れるかもしれない。

(本学法学部非常勤講師)

注1 房玉清は<从外国学生的病句看现代汉语的动态范畴> (《语言教学与研究》1980年第3期 北京語言学院)の中で、輕読と付着という特徴から、動詞後の「在」そして抽象的な趨向しか表していない趨向合成補語などを、アスペクト助動詞の「了」「着」「过」と合わせて「动态助词」(日本語の助動詞に当たるが、しかし中国語の中で「要」「会」などを助動詞と呼んでいる。)と称している。

なお、当該説は、1987年10月に語文出版社刊《现代汉语语法研究的现状和回顾》(朱一之・王正剛編)所収の徐静茜<趋向动词研究综述>によって言及されている。

一方、藤堂明保・相原茂は『新訂中国語概論』(大修館書店 1987年)の中でもアスペクト助動詞として「了」「着」「过」と並べて抽象的合成趨向補語をあげている。但し、「在」は入っていない。

ただ実際のところ、当該説は普通の文法書や教学現場においては取り入れられてはいない。

- 2 ここでいう「場所状語」はつまり中国語でいう「地点状語」のこと。動詞前に置く修飾語の一種で、構造の角度から前は「介词结构」(介詞構造、介詞連語)、最近は「介宾短语」(介賓連語)と称する。

なお、「在」は時間賓語を取るので「時間状語」もあるが、小論において議論しやすいために「時間状語」等の時間賓語を取る文例の考察を省くことにした。ただ、それも場所賓語を取るのと同じように解釈できるようである。次に言及する「到」などもその原則に従う。

- 3 《汉语语法分析问题》 商务印书馆 1979年。邦訳は筆者によるもの。
- 4 結果補語前の動詞に関して中心動詞や本動詞などの言い方があるが、形態最重視という観点から、筆者は前動詞という言葉を用いることにした。
- 5 日本語の意味としては「当たった」のほうがよろしいと思われるが、次の§2.2例の「了」を使う文との対比もあって「当たっている」という訳も入れた。
- 6 *4を参照。
- 7 1987年、王硯农ら編。322の内、百以上の動詞と組めるものが9、30以上の動詞と組めるものなら、更にプラス20。結果補語を見る場合、その前の動詞も合わせて考えるべきであろう。しかし紙面の関係で、その辺の詳しい考察は他の機会に譲る。
- 8 小論は「在」を論じるものなので、「到」そして次に言及する「向」「往」「自」「干」などについてはまた改めて詳細に見ることにしよう。
- 9 *7の辞書によれば、322の補語のほとんどは「完」と同類であるように思われる。
- 10 いわゆる趨向補語も結局、一種の結果補語である。結果補語と趨向補語の枠組み、そして補語全体の整理分類について筆者は、拙稿「補語分類管見」の中で述べている。それは中国語研修学校の『教学通讯』12号(1992年6月)に掲載される予定であるので、ぜひ合わせてご覧ください。

[参考文献]

- 本文及び注の中で書き記している外に、おもに次のような文献を参考にしている。
- 呂叔湘 1980《现代汉语八百词》商务印书馆 (その日本語訳 牛島徳次・菱沼透 1983『現代中国語用法辞典』 現代出版)
- 王松茂主編 1983《汉语语法研究参考资料》 中国社会科学出版社
- 中国社会科学院语言研究所现代汉语研究室編 1987《句型和动词》 语文出版社
- 胡明扬 1990《语法和语法体系》(張志公主編《教学语法丛书》之一) 人民教育出版社
- 张理明・于根元 1990《动词短语》(《教学语法丛书》之七)
- 范晓 1990《介词短语・复指短语・固定短语》(《教学语法丛书》之九)
- 三野昭一 1978『中国語文法の基礎』 三修社
- 興水優 1985『中国語の語法の話』(藤堂明保・香坂順一監修『中国語研究学習双書』8) 光生館
- 鈴木達也 1990『基礎から学ぶ中国語——大学中国語入門テキスト——』金星堂
- 寺村秀夫 1987/1981『日本語文法』(日本語教育指導参考書4/5) 上/下 国立国語研究所